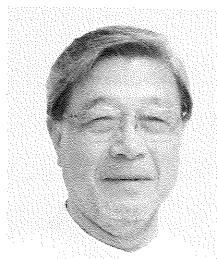


リウマチと共に歩んだ 50年の医師人生



佐川昭リウマチクリニック

佐川 昭

はじめに

日本リウマチ友の会創立60周年まことに
おめでとうございます！

私は医師になって昨年で50年を迎えました。医学部卒業以来の時間全てを皆さんと共に歩んできた人間の一人として、私が過ごしてきた道のりをたどりながら、今日の姿そして明日へと繋がるリウマチ治療の未来を覗いてみましょう！

1. これまでの私のリウマチ人生の生き方

今、私は最高に楽しく幸せなリウマチ人生を歩ませてもらっています！

これも今までに私を育ててくれた環境のおかげと思っています。それは北海道大学という大らかで伸びやかな環境、懐の深い先輩たち、私を支えてくれたスタッフ、同僚や後輩たちの存在が大きい。もちろん家族の辛抱強い支えも深く大きい。そして何よりも、この身勝手な振る舞いの私を許し信じてくれた多くの患者さんたちに、今の私を育ててくれたことを深く感謝しなければなりません。少なくとも私に関する限り、医者という職業はたいへん恵まれた仕事です。数々の失敗はあり、多くの迷惑をかけたはずなの

に、いつも感謝の言葉と心で包まれている。今もこんな環境においてもらえているのだ。頭を冷やし少し謙虚にならねばならないとも思っています。

2. 臨床リウマチ学会での特別講演「リウマチ実地診療のあるべき姿」

2014年11月、第29回日本臨床リウマチ学会が織部元廣会長（大分市織部リウマチ科内科クリニック）のもと、福岡市で開催され、「リウマチ実地診療のあるべき姿」とのテーマでの特別講演をご指名いただいた。私が医者人生のまとめの時期にかかっていると会長の温かいご配慮からとありがたくお受けさせていただいた。私が描く「あるべき姿」の基本は、何よりも患者さんを思う心が大切でありT2Tを守ることを前提にし、さらに次のことが重要であると訴えました。つまり、1. 自らがまず健康で楽しく仕事ができる。2. 医の倫理を守る。3. 責任感を持つ。4. Multi-talented（なんでも知っておく）であれ。5. 謙虚であれ。6. やる気を持って何でも積極的にやることとしました。

さらに患者さんに対しては、全生活面でのサポート（トータルマネジメント）を考えて

リウマチ実地診療のあるべき姿

T2Tを守った上で更に下記が重要
何よりも患者さんを思う心が大事

- | | |
|----------------------------------|-----|
| ● 自身がまず健康で楽しく仕事 | 健康 |
| ● 医の倫理を遵守 | 倫理 |
| ● 責任感 | 責任 |
| ● Multi-talentedであれ | 能力 |
| ● 謙虚さ(判断上,行動上) | 謙虚 |
| ● やりたいこと、やらねばならぬ
ことが沢山ある(やる気) | やる気 |

出来れば全生活面でのサポートを考えて
あげられると良い(トータルマネジメント)

あげられると良いと結びました。このトータルマネジメントが、クリニックといえども大事な目標の一つと考えています。さらに具体的な内容は3部構成とし、第一は、クリニックの運営。第二は、患者さんに対する具体的な対策。第三は、対外活動について述べました。

まず第一の点では、より良いクリニックの運営のためにスタッフの育成と協力体制の構築が必須と考えていた時、ドロッカーの「マネジメント」を手にしてみました。そこには自らの組織として社会に貢献するうえで三つの役割があると述べていました。①自らの組織が特有の使命を果たす。②仕事を通じて働く人たちを生かす。③自らが社会に与える影響を処理するとともに社会の問題について貢献する。という、まさに私たち開業医が関わっているのはこのことだど気がつき、今後はこの原則を頭に入れ、「リウマチ治療の一翼を担うことが目標で、これをスタッフで共有し、患者さんへの対応に共通認識を持ってきちんと当たる」と考えてい

くことにしました。

さらに対外活動は多くの仲間と積極的に活動を続けており、札幌近隣だけでも、自分たちがオリジナルアイデアを持って立ち上げたものとして膠原病談話会(症例を30-40分掛けて討論)、膠原病フォーラム(臨床部門と検査部門の合同での検討会)、RA画像診断研究会(画像に重点をおいた検討会)、SRCN(札幌リウマチ膠原病ネットワーク、市内7施設の共同研究組織で毎年日本リウマチ学会に発表)、RA大通り連携の会(当院患者について他科ドクター含めての症例検討会)、斗南病院連携カンファレンス(当院入院患者中心の症例検討会)などがあり、さまざまな側面からリウマチを診ていこうとの動きを続けてきています。また最近では日本リウマチ実地医会の北海道版を作り、多くの仲間と毎年札幌リウマチ市民公開講座を開いています。普段からのこれらの活動が地域としての診療連携をしっかりとしたものになっていると自負しているところです。

3. リウマチの関節エコー検査への熱い思い

2010年11月に実地医として初めて第25回日本臨床リウマチ学会（東京）を主催させていただき、当時発刊した著書「手にとるようにわかる関節リウマチの超音波検査」の巻頭の言葉は今でも私のエコーに対する熱い気持ちを表しています。その中の一部分を引用いたします。

1) 私は毎日のリウマチ診療が楽しみで仕方がない！前回処方薬の効果が今日の患者ではどう現れているか？本日受診の新患はどんな状態なのか、診断はつくのか、つけられるのか？など毎日が新しい問いかけと謎の連続だ！それは、自分なりの力で謎を解き、少しでも解決へと向けることができるからだと思う。それもリウマチ診療の進歩のおかげである。①自分なりに大体リウマチの診断がつけられ（ACR/EULAR 分類基準）、②診断後には、有力な治療法があり（生物学的製剤など）、③それらの効果を追う手段もがある（DAS、関節エコーなど）、④うまくいけば本人・家族に喜ばれ、⑤その結果医師として満足感が得られることなどです。

2) リウマチ診療を生き生きとさせているもの！特にリウマチ診療を生き生きとさせてくれているのは、毎日行っている関節エコーに他ならない。それは炎症で痛くて腫れて熱感のある手首や指に触れ、プローブを当てるとなんと真っ赤なめらめらと燃えている姿が映し出されるのだ！まさに「燃えている女」と言いたくなるような姿だ！実際にその

言葉を発すると「そんなところ燃えたくない！」との素早い反応だ。それではその燃えているところを鎮めようと話は先へ進む。このように診療の現場では、この燃えている姿を見せることによって本人がことの重大さを理解し、リウマチを鎮めようという強い気持ちに導くことができる（治療心と呼び起こす）。その意味ではまさに関節エコーは、リウマチ患者さんにとって強力な支援者だ。今やこの方法に慣れたリウマチ医にとって、これなくしてリウマチ診療は考えられない。片腕を奪われた感じでまともな診療を続けることはできないだろう。それほどこの方法はパワーと迫力、実力があり診療に深みを与え、かつまた感動をも与えてくれる存在である。まだこの世界を知らない友人たちにぜひ早くこの感激を味わってほしい。そして患者さんと共に闘う気持ちを一つにしてほしいと願うものです。



3) まずプローブを当ててください！するとメラメラとでなくても赤いスポットがいくつか見えてくるでしょう。これが炎症の所見なのです。できればその所見を患者さんと共有し

てください。そこから新しいリウマチ診療の旅が始まるのです。

4) 日本人初の症例発表

私が初めてこの手段をまともに見たのは2000年秋のフィラデルフィアでのACR(アメリカリウマチ学会)会場でした。画像中心のポスター会場で関節の写真と共に燃えているものが映っていたのです。これはすごい!我々でもできるのではないかと早速自院(前勤務先)に戻り臨床検査技師と相談し、初の日本人症例を次春の日本リウマチ学会に発表することになったのです。その後、症例と研鑽を重ね、他の施設からも習得希望者が来院し、徐々に日本での関節エコーの輪が広がっていったのです。

【本邦初のパワードプラを用いたエコー症例の発表 第45回日本リウマチ学会総会 2001年(20年前) W27-3 パワードプラ超音波法による慢性関節リウマチの関節病変の検出 札幌山の上病院リウマチ膠原病センター 佐川昭、岸本理和、谷村一秀、北野明美、三上通英、居川幸正、後藤裕美子、篠原正英、蕨建夫】

5) これからのリウマチ診療と関節超音波検査

このように日本での関節超音波検査が広がりリウマチ診療の質を高めるものと思われませんが、乗り越えるべき問題も山積しています。いずれにしても、この有益で有用な方法に少しでも多くのリウマチ医が触れて、その醍醐味や素晴らしさを実感していただきたく、日々奮闘している臨床の現場から本書を出版するものです。と2010年11月に結ん

でおり、本書を発行してもう10年を越えており時の経つ速さに驚いています。

4. リウマチ科の医師の幸福度が最も高い!

興味深い資料を見つけましたので紹介させていただきます。それは2015年3月付けで聖路加国際病院の岸本暢将先生による書評の中の一文です。【2012年米国で25の専門科、約3万人の医師に行った幸福度調査では、専門科の中で医学生に人気の高い皮膚科、眼科をしのぎリウマチ科の医師がもっとも幸福度が高いことがわかりました。この理由に関して2012年米国リウマチ学会長であったO'Dell医師が解説をしていたのですが、その一部を以下に紹介します。

- 1) 高齢者から小児まですべての年齢の患者さんを長期にフォローする。
- 2) 臓器一つを診るのではなく全人的にケアを行っている。
- 3) 我々は診断医であり～シャーロックホームズ～最後の砦となる。
- 4) すばらしい治療法があり患者さんそして家族を幸せにさせる。
- 5) 患者さんから多くの抱擁(ハグ)を得る。などが印象的でした】。以上の内容は2010年に私が上記の巻頭言で述べている内容ととても似ており、日本でも同様と驚いている次第です。しかも私はその2年前に書いているのです(自慢話)。

5. 日本リウマチ友の会北海道支部との関わり

北海道の対外活動のところで触れましたが、日本リウマチ実地医会（リウマチを専門としている開業医の会）の北海道版を作り、多くの医師・看護師・リハビリスタッフを中心とする仲間と毎年札幌リウマチ市民公開講座を開いていますが、医療関係者の講演の中に必ずリウマチ友の会北海道支部からの講演を織り込み、また会場では友の会の会員による自助具の紹介と販売を行ってきました。昨年2020年の10回目はさすがに新型コロナウイルス蔓延のため会は延期となりましたが、それまで9年にわたり友の会や毎年250名を超える参加者との深いつながりを保つことができ、皆さんの心の中に友の会の活動の姿が残っていると思われま

張るつもりであります。これからもずっと長く頑張りましょう！

（さがわ あきら）

6. 最後に

このように私の医師人生は、まさにリウマチ治療の発展そのものと並行した中で過ごさせてもらいました。リウマチ治療の発展はこれからもまだまだ続きます。この素晴らしい分野でこの時期に働かせてもらったことに深く感謝いたします。何よりも私の我がままと身勝手な行動を許し大きな心で受け止め長くお付き合いしてくれている患者の皆さま方に心よりお礼を申しあげます。新型コロナウイルスの問題もまだ解決には至っていませんが、日本リウマチ友の会60周年を一つのきっかけとして、リウマチと闘っている皆さま方にとってさらに良い年になるよう心より願ひ、私もまた心を新たにして仲間たちと頑

